

伊丹福音ルーテル教会 聖霊降臨後第二十一主日礼拝のしおり

2021年10月17日

前奏

招きのことば：詩編 91 編 9-16 節

あなたは主を避けどころとし いと高き神を宿るところとした。

あなたには災難もふりかかることがなく 天幕には疫病も触れることがない。

主はあなたのために、御使いに命じて あなたの道のどこにおいても守らせてくださる。

彼らはあなたをその手にのせて運び 足が石に当たらないように守る。

あなたは獅子と毒蛇を踏みにじり 獅子の子と大蛇を踏んで行く。

「彼はわたしを慕う者だから 彼を災いから逃れさせよう。わたしの名を知る者だから、彼を高く上げよう。彼がわたしを呼び求めるとき、彼に答え 苦難の襲うとき、彼と共にいて助け 彼に名誉を与えよう。生涯、彼を満ち足らせ わたしの救いを彼に見せよう。」

罪の悔い改めと赦しのことば

会衆： 私たちは生まれつき、自分中心、わがままで、心の中に本当の愛のかけらもありません。思いとことばと行いで、まことの神を軽んじて、となりびとにも愛のない、神の御前に罪人です。神様、ほんとうにごめんなさい。

私たちは祈ります。私たちを救うため あなたがお与えくださった イエス・キリストによって、どうかあわれんでください。アーメン。（短い黙祷を持ちましょう）

牧師： 何でもおできになる神様は、あなたのすべての罪を赦すために、そのひとり子、イエス・キリストを十字架の上で死に渡してくださいました。ですから神様の御言葉をとりつく務めに任じられた牧師として、今、あなたがたに宣言 します。父と、御子と、聖霊のお名前によって、あなたの罪は赦されました。安心して行きなさい。**アーメン。**

使徒信条

われは、天地のつくり主、父なる全能の神を信ず。

われは、そのひとり子、われらの主、イエス・キリストを信ず。

主は聖霊によりてやどり、おとめマリヤより生まれ、ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け、十字架につけられ、死して葬られ、

陰府(よみ)にくだり、三日目によみがえり、天にのぼり、父なる全能の神の右に座したまえり。

生ける人と死にたる人とを審かんがため、かしこより再びきたりたまわん。

我は聖霊を信ず、また、聖なるキリスト教会、すなわち聖徒の交わり、罪のゆるし、からだのよみがえり、かぎりなきいのちを信ず。 アーメン。

祈り

愛とあわれみに満ちておられる私たちの父なる神様、心から感謝をいたします。今朝も共に礼拝にあずかり、あなたの御言葉をいただいて一週間を始めます。あなたは今朝も御言葉によって私たちに信仰を与え、強めてくださいます。罪の赦しをいただき、新しいいのちをいただきます。ここから私たちの幸せな新しい一週の歩みが始まります。

あなたは御言葉を聞く私たちをここから生活の場に送り出してくださいますが、あなたはまた生活の現場にも来てくださって私たちを導き支えてくださいます。日常生活の中でこそ、あなたに導きを受け、あらゆる災いから守られ、更に隣人の力になれるように鍛えていただきます。新型コロナ・ウィルスの感染拡大を防ぐために、なお緊張感を保っていかなければなりません。その中でも御手にゆだね確信をもって、あなたの子どもとして安心して生き生きと生きる日々を与えてください。

この祈りを、私たちの救い主であり主であるイエス・キリストのお名前によってお祈りいたします。 **アーメン**

使徒書朗読：ヘブル人への手紙 5章 1-10節

大祭司はすべて人間の中から選ばれ、罪のための供え物やいけにえを献げるよう、人々のために神に仕える職に任命されています。大祭司は、自分自身も弱さを身にまとっているのです。無知な人、迷っている人を思いやることができるのです。また、その弱さのゆえに、民のためだけでなく、自分自身のためにも、罪の贖いのために供え物を献げねばなりません。また、この光栄ある任務を、だれも自分で得るのではなく、アロンもそうであったように、神から召されて受けるのです。同じようにキリストも、大祭司となる栄誉を御自分で得たのではなく、「あなたはわたしの子、わたしは今日、あなたを産んだ」と言われた方が、それをお与えになったのです。また、神は他の個所で、「あなたこそ永遠に、メルキゼデクと同じような祭司である」と言われています。キリストは、肉において生きておられたとき、激しい叫び声をあげ、涙を流しながら、御自分を死から救う力のある方に、祈りと願いとをささげ、その畏れ敬う態度のゆえに聞き入れられました。キリストは御子であるにもかかわらず、多くの苦しみによって従順を学ばれました。そして、完全な者となられたので、御自分に従順であるすべての人々に対して、永遠の救いの源となり、神からメルキゼデクと同じような大祭司と呼ばれたのです。

福音書朗読：マルコによる福音書 10章 35-45節

ゼベダイの子ヤコブとヨハネが進み出て、イエスに言った。「先生、お願いすることをかなえていただきたいのですが。」イエスが、「何をしてほしいのか」と言われると、二人は言った。「栄光をお受けになるとき、わたしどもの一人をあなたの右に、もう一人を左に座らせてください。」イエスは言われた。「あなたがたは、自分が何を願っているか、分かっていない。このわたしが飲む杯を飲み、このわたしが受ける洗礼を受けることができるか。」彼らが、「できます」と言うと、イエスは言われた。「確かに、あなたがたはわたしが飲む杯を飲み、わたしが受ける洗礼

を受けることになる。しかし、わたしの右や左にだれが座るかは、わたしの決めることではない。それは、定められた人々に許されるのだ。」ほかの十人の者はこれを聞いて、ヤコブとヨハネのことで腹を立て始めた。そこで、イエスは一同を呼び寄せて言われた。「あなたがたも知っているように、異邦人の間では、支配者と見なされている人々が民を支配し、偉い人たちが権力を振るっている。しかし、あなたがたの間では、そうではない。あなたがたの中で偉くなりたい者は、皆に仕える者になり、いちばん上になりたい者は、すべての人の僕になりなさい。人の子は仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人の身代金として自分の命を献げるために来たのである。」

讚美歌 517 番

1. 「われに来よ」と主は今、やさしく呼びたもう。などで愛のひかりを 避けてさまよう

※ 「かえれや、わが家に 帰れや」と主は今呼びたもう

2. 疲れ果てし旅人、重荷をおろして、来たり憩え、わが主の愛のみもとに ※

3. 迷う子らの 帰るを 主は今、待ちたもう 罪も咎もあるまま 来たりひれ伏せ ※

アーメン

説教：「仕えられるためではなく仕えるために」

私たちの父なる神様と御子イエス・キリストから、恵みと平安が豊かにありますように祈りつつ、御言葉をとりつぎます。

イエス様は弟子たちにどのように幸せに生きるかを教えてくださいました。主体性と向上心を持ちつつ互いに仕えあって生きる幸せです。神様から愛され、赦され、安心しています。自分を抑え自分を磨いて、もっと神様と人々の役に立てることを望んでいます。互いに尊敬しあって助け、助けられて歩んでいきます。ここに神の国の生き方があります。

しかし、今朝開かれた聖書の箇所からわかることは、このような生き方は弟子たちには全く分からなかったということです。十二人のお弟子にはもと漁師だった二組の兄弟がいました。ゼベダイの子ヤコブとヨハネはそのうちの二組です。彼らはイエス様に思い切ってお願ひしました。私たちはあなたと三年間過ごしてきた、いよいよあなたはエルサレムに向かって歩み始められた、エルサレムであなたは王座に座り、今までユダヤの国を支配してきたローマの軍隊を打ち負かして、ダビデの国のような私たちの国の独立を勝ち取るのでしょうか。イエス様、あなたが王座に着いて栄光をお受けになるとき、私たち兄弟をあなたの右と左に座らせてくださいませんか、私たちはあなたに従ってきました、どうぞ私たちの努力に報いていただけませんか」という願いです。ここに少なくとも三つの間違いがあります。自分たちがえらくなること、誉められること、人から指図されないで人の上に立って気持ちよく生きることが幸せと考えていたことが一つ、ほかの弟子たちの抜け駆けをして、自分たちだけがそのような特権を得たいと

願っていることが二つ、そして一番大きな間違いは、イエス様が民を支配し権力をふるうためにエルサレムに行こうとされていると思い込んでいたことでした。

弟子たちがイエス様に従ってきた本音の気持ちを読み取れます。自分たちだけが偉くなり、誉められて、人々を支配するようになるという報いをイエス様に期待していたのです。そして、ほかの弟子たちはヤコブとヨハネが自分たちの知らないところでイエス様にそんなお願いをしたと知って怒りに燃えています。弟子たちの間では互いの信頼も尊敬もなく、みんななんとかイエス様の一番弟子になって、あとで高い地位につかせてもらおうと、上のイエス様にへつらい取り入って、横の同僚の弟子たちを隙があれば蹴落とそう、という気持ちでした。

イエス様はまずヤコブとヨハネに語ります。そんなわがままな彼らを叱るのではなく、むしろ身近に引き寄せてお話しくださしました。「お二人は自分が何を願っているのかわかっていないようですね、わたしは今から苦しむためにエルサレムに行くのですよ。」二人はこたえます、「私たちも覚悟ができています。」イエス様はあとでご自分が十字架について死ぬときに、弟子たちも確かに苦しむるので、「そうですね、たしかにあなた方も苦しむことになります、でも誰がわたしの右と左にすわるのかはわたしにもわかっていません」と言われました。イエス様は今からご自分がエルサレムで受ける苦しみのことを杯とか洗礼と言う言葉で弟子たちに話しました。おそらく二人は、今からエルサレムへ行って少々の苦しみがあっても、また自分たちが右と左に座る確証がなくても、とにかくできることをしてがんばっていくぞ、と意欲をもったかもしれません。

さらにイエス様はほかのお弟子たちが二人の抜け駆けを知って怒っているのを見て、お弟子たち全員を呼び寄せました。ここから語られたことがマルコによる福音書の中心となるとも言える重要なことでした。これまで何度も弟子たちに教えて、ときには子どもをだきあげてまでして教えてくださったことです。

あなたがたが求めているのは異邦人の求めていることだ。わたしの弟子なら人を支配し、権力をふるうことがえらい人だと思ってはならない。むしろ互いに仕える人、皆のしもべになる人が一番偉い人だ。イエス様の意外なこの言葉は弟子たちにどのように響いたのでしょうか。

イエス様はこれからエルサレムに行って人を支配する王になるのではありません。多くの人の身代金としてご自分のいのちを差し出し、罪と悪魔と死の力にとらえられている人々が解放され、救われるように、そのようにして人々に仕えて十字架で苦しんで死んでくださるのです。イエス様がわたしの罪のために身代わりに死んでくださったことを信じて洗礼にあずかる人はみな、神様から罰ではなく赦しとあたらしい命をいただきます。そして、これまで傲慢にも自分のプライドに縛られて人の上で権力をふるうことしか考えていなかったことをすっかり赦していただき、そのかわりにイエス様のように主体的で、向上心をもった、人に仕えたいと思う命溢れる心をつくってください。イエス様がいよいよエルサレムに行かれるのは、決して

異邦人の求めるような国を作るためではありませんでした。むしろ、互いに仕え合う人たちの神の国を完成されるためだったのです。

異邦人が求める支配と権力を得たとして、本当に幸せではありません。人の上に立ちたい、他人からささずされないで自由に生きていきたい、身内だけが信頼できる、抜け駆けし人を出し抜いても自分たちの得することを実現したい、と考えつつ、互いに信頼できず、裏切られないように自分を守って生きています。腹を立て、仕返しを考え、泣き寝入りを強いられるというまでも根に持ちます。安心や安泰を求めても心休まらず、自分のために人やものを集めようとしても満足できません。そもそも、私たちの自己中心でわがままな心がむき出しになって互いに傷つけ、妬み、恨み、復讐し、悲しみと落胆とあきらめが待っているだけです。努力や幸運で一時的に栄光が手に入っても、心が休まりません。手に入らなかつたら、そこにはない幸せを一生幻想として縛られて生きていきます。

イエス様がもたらされる神の国はどんなものでしょうか。それは互いに仕えあう幸せです。まずは知り合うことです。互いの誕生日を知っていますか、何をうれしく思い、何を悲しんでおられるか互いに知っていますか。そしてそのようなお互いを受け入れあうことです。必ずしも考え方に同意することではありません。しかしその方がそのように考えている、という事実を受け入れます。互いに助け合い、支えあいます。知られたくないこと、触れられたくないこと、理解するには時間がかかることと思っているなら、互いに尊重しあいます。助けるときは苦勞が伴いますが与える喜びを感じることが出来ます。けれどもある人にとって誰かから助けを受けることは心に抵抗を感じてかたくなに拒んでしまうことがあります。人からの助けも素直に感謝をしてうけとめることも幸せです。

人に仕える、という、何かぼろ雑巾のように人に利用されて終わってしまう、と恐れがありますね。しかし、イエス様は言いなりになって、言われるまま、頼まれるまま、気に入られるように生きていくことをもたらされたわけではありません。私たちが人に見せている表面的な姿ではなく、私たちの必要の本質を見抜いてくださっています。私たちへのきよい関心と愛がなければ私たちの本当の問題を見ることはできません。イエス様はあなたやわたしの罪深い自己中心の心の性質を、威厳をもって自らをおささげくださることによって、その罪を赦して新しいのちを与えてくださいました。そして私たちが成熟にむかって歩めるように、私たちも神様の愛に根差して、人に甘えず、人に流されずに、主体的に向上心をもって互いに仕えあって歩むように導いてくださいます。

また、互いに仕えあってもべとして生きていくということは、今与えられている立場や地位を降りて、人々の底辺に降りて仕えるということを意味していません。人の役にたって生きていくと、更に大きな責任を任せられ、さらにたくさんの人のお世話を託されることもあるでしょう。与えられた立場を、権力をふるう自己満足や自己陶醉のために用いず、むしろ、与えられている裁量に感謝をして、それを人々が生きがいをもって仲間とともに成長していく幸せのた

めに最大限に用いていくことが仕えあって生きるということです。また、今はまだ自分には立場や地位がない、と思うなら、今の自分でできることを創造的に積極的にさがしだす心構えで生きることですね。

ヤコブとヨハネはイエス様のために確かに苦しみました。ヤコブは使徒としてはじめて殉教者となりました。ヨハネは島流しに会いました。けれども、最後まで神様に愛されている喜びと人々にお仕えできる幸せを人々と分かち合いました。彼らはエルサレムで十字架にかかって死んでくださったイエス様によって、ほんとうの生きがいと幸せを得たのです。イエス様がもたらしてくださった神の国を生きたのです。私たちも互いに仕えあう苦労と喜びを分かち合っ
て、今から主体的に向上心をもって互いに仕えあって神の国を生きていきましょう。今週一週
間も罪赦された幸いを感謝しながら、主イエス様の与えてくださるあたらしい命を生きていき
ましょう。

人の子は仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人の身代金として自分の命を献
げるために来たのである。マルコ 10:45

人知をはるかに超えた神様の平安が、あなたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってく
ださい。アーメン

讚美歌 249 番 献金 献金感謝の祈り

1. 我、罪びとの 頭(かしら)なれども 主は我が為に 命を捨てて つきぬ命を 与えたまえり
2. あまつ御国の 民とならしめ 幹に連なる 小枝のごとく、ただ主によりて 活かしたまえり
3. 妙にも尊き み慈しみや、求めず知らず 過ぎしうちに、主はまず我を 認めたまえり
4. 思えばかかる 罪びと我を 探し求めて 救いたまいし 主のみ恵みは 限りなきかな

アーメン

主の祈り

天にましますわれらの父よ、願わくはみ名をあがめさせたまえ。みくにを来たらせたまえ。
みこころの天になるごとく地にもなせたまえ。われらの日用の糧を今日も与えたまえ。
われらに罪をおかす者をわれらが赦すごとく、われらの罪をもゆるしたまえ。
われらを試みにあわせず、悪より救い出したまえ。
国と力と栄えとは、限りなくなんじのものなればなり。アーメン。

頌栄：讚美歌 541 番

父、御子、御霊のおお御神に ときわに絶えせず み栄えあれ み栄あれ **アーメン**

祝福の言葉

仰ぎこいねがわくは、私たちの主、イエス・キリストの恵み、父なる神の愛、聖霊の親しきお交わりが、御前に集う一同とともに、今日も、この一週間も、いく久しくとこしえまでも、豊かにありますように。**アーメン**

後奏